

絶唱二千回！蝶々夫人を支えた卵とビフテキ

栄光はある日突然やって来る！日本のプリマドンナ・三浦環たまきに世界のプリマドンナの名声と喝采をもたらしたものは、まさしく極め付きの名作「マダム・バタフライ」（蝶々夫人）であった。彼女はこの「蝶々夫人」を演じるために生まれ、事実、それを演じ抜いて逝った永遠のオペレッタだった。公演回数二千回、その超人的な美声とスタミナの秘密はいったい何だったのだろうか。

三浦環は明治十七年、東京に生まれ、東京音楽学校在学中、日本人による最初のオペラ公演「オルフェオ」に参加した。そして、東京音楽学校卒業後ただちに帝国劇場所属のオペラ歌手となり、その四年後、キューピットの矢として飛んで来たのが「マダム・バタフライ」だったのである。

彼女は日本での成功に自信を得ると、以後、ヨーロッパやアメリカをはじめ、みずからバタフライそのものと化して世界中を駆けめぐった。そして第一次世界大戦が始まったばかりのころ、ロンドンで「マダム・バタフライ」を上演することになり、その初日、ドイツのツェッペリン飛行船の空襲にあうのである。

が、そのとき台本では、いとしのピンカートンの乗った軍艦が長崎に入港、合図に大

ミート de meet

塩・「シヨウ」のタイミンゲ

牛肉のロース肉など、脂の多い部位は、焼く五分前ぐらい、ヒシなどの赤身肉は、焼く直前がおすすです。

塩や「シヨウ」をよく効かせたときには、あらかじめ準備をしておくとよいでしょう。

赤身肉にあまり早く塩・「シヨウ」をしてしまうと、うま味や肉汁が風味と一緒に損なわれてしまうので注意してください。

砲が一発鳴ることになっていった。ところが大砲は、なんと二発、三発と続けて鳴るのである。彼女はかまわず歌い続ける。絶唱の果て、ふっと気づくと、劇場にはほとんど誰もいなくなった。そして「マダム、逃げないと死ぬ。空襲だ！」と誰かが叫んでいた。一九一八年、イタリヤのオペラ歌手カルゾーとホテル「ニツカー」で記念の晩餐会を開いたときのこと、カルゾーが「マダム三浦、わたしの声はマカロニ育ちですが、あなたの美声は何育ちでしょうか」とたずねた。「わたしは蝶々夫人の第一幕の始まる前に、

舞台裏で生卵を二つ飲みます。つぎの幕のときにも二つ、最後の幕の前にも二つ飲みます」と彼女。当時、生卵を飲むのは世界中で日本人だけだったので、カルゾーは二の句がつけなかったという。このエピソードとともに、いまひとつつけ加えておきたいのは、じつは彼女が、その命ともいえる声帯を守るために、毎日ピフテキを食べていたことである。二千回という超人的公演記録は、並みの食事からは生まれえない。